

★海外文献紹介★

『遊びの世界』

by Donald Baker

Childhood Education

March 1977

『フリードリッヒ・

フレーベルとの出会い』

by Kristina Leeb-Lundberg

Childhood Education

April/May 1977

○「遊びの世界」

イギリスのウェイマウス教育大学の英語と演劇の教授であるドナルド・ベイカーという人は、幼児の遊びを比較文化的に考察することによって、遊びの根源的なとらえ方をしている。

彼は、西インドやマレーシア、西アフリカ、ヨーロッパ、アメリカなどの地域でみられる子どもの遊びを比較し、遊びは人間生

活の普遍的現象であるという。にもかかわらず、こうした異文化の中で、子ども達の遊びがどこで（場所）、いつ（時間）、だれと（人々）行われるかについて注目してみると、いくつかの違いが出てくることを強調している。

まず、どこで（場所）ということに関してだが、その中で最も大きな影響をもつ要因は、気候であるという。イギリスやアメリカでは家の中で過ごす時間が多いがマレーシアや西アフリカや西インド諸島では、子どものみならず、家族が外で生活する時間が多く、従って、子どもはいつも屋外の環境を十分試してみることができ

る。その上、「熱帯での遊びの活動の多くは、単に遊びではなく現実なのである。アフリカの子どもが母親の家事を手伝っているのを見ると、遊びか仕事か決めがたい。いずれにしても、空想と現実の区別は、文化や気候がどうあれ子どもにとってはかすかできにくい。西インドでは、子どもは魚つりにいって獲物も実際に料理し、食べる。つまり、遊びと仕事はこの場合ひとつに溶けあう」

彼らのおもちゃは、コナッツとかコヤス貝の貝殻とかの自然物ですが、これらは教育目的を考えてつくられる高価なおもちゃより、より想像的に使えるところつけ加えている。

このようにして、西欧の都市の子どもは、物理的な環境の制約を受けていること自体が情緒のフラストレーションや様々な学習問題をおこすものとなるという。だから、「遊びの中で子どもは自分の力を発見し、世界を広げていくのだが、不幸にも、彼の世界は広くなく、動物園の動物のように情緒のストレスが子どもにかかってくる」

この空間的な欠如を補充するために、都市化された西欧では、家庭やプレイグループやデイ・ケア・センター（保育所）で、人工的に遊びの場を提供しているわけである。

次に、いつ（時間）ということに関して考えてみると、熱帯では子どもは疲れたり、お腹がすくまで遊ぶのにくらべて、西欧では時間の観念にあまりにとりつかれすぎているという。「マーガレット・ミードは、西欧の子どもは、創造的、想像的な遊びに没頭することを奨励されているという仮定の下で、目的のない仕事をしている」といっている」

彼女の書によると、「サモアの子どもは、遊びを学習することによって働くことを学ぶのではなく、四、五歳の子どもの頃から、全体社会の構造の中ではつきりと意味のある仕事をしている」というのである。同じく「西アフリカや、マレーシアの子ど

もも、想像遊びをするのではなく、彼らは実際に生活の中で家事として行っている」

最後に、だれ（人々）と遊ぶかということを考えてみると、「近代生活の最も顕著な姿は、お互いに面とむかい合うということが少なくなったことである。テレビ・ラジオ・電話は生物の行動パターンをかえた」

今では、「お話でさえ、テープやテレビで語られ、実際に目の前の生きているおとなによるのではないのである」さらに、著者は、「子どもが触れ、味をみ、においをかぎ、見、聞くということとを文字通りやらせることによって、彼らを育て、不思議さや喜びを抱きつつこの世界とかかわらせる」ことの大切さを説き、「このことは、技術文明や概念形成や論理的思考を彼らに教えるよりもっと大切なことである」といっています。なぜなら、「私達は感じもしないことを表現することはできないのだから」

結論として、私達が子どもの遊びと呼んでいるところの子どもの活動は、時間や場所や人によって、日常生活の仕事から分離される必要はないと強調している。「ネビル・スカーフ = (Neville Sturt) がいうように、ユートピアとは、仕事遊びの場所であ

る。小さい子どもが永久に遊びたいというのは、時間や、場所や、仕事と遊びの区別がない宇宙のことをいっている」と結んでいる。

○「フリードリッヒ・フレーベルとの出会い」

アメリカの初等数学の指導主事が、幼児の数学プログラムについて研究するために、イギリスのライセスター (Leicester) というところにあるブリティッシュ・インファントスクールを訪れたことにより、フレーベルとの出会いをするという記事である。

著者は、その学校で行われていた幼児のすばらしい数学的作業に心を打たれ、幼児の教育における数学についての文献を調べることになる。

すると、何と四〇〇ページもあるキンダーガーデン・ハンドブックの中に、ほんの一、二ページしか数学について割かれていないことに驚き、古い時代にさかのぼって調べてみることになった。一九五〇年代も、一九四〇年代も前述のような結果しかみられず、一九三〇年代、一九二〇年代には、ほとんど数学に関するものはみられない。ところが、一九一〇年代に、恩物と作業 (Gifts and Occupations) といわれる言葉をみつけ、フレーベルとの出会

いが始まるのである。

最初は、マリア・クラウスとジョン・クラウスによって、一八八二年に紹介された図解の数学的教材に驚き、フレーベルの恩物というものを知るのである。著者は、「実際、幼稚園や小学校の数学におけるピアジェ・タイププログラムとして今日薦められている活動を思い浮べる程、非常に近代的な数学の見地から興味がある」と述べている。

さらに、フランク・ロイドライトが、彼の自叙伝の中で、彼自身いかにフレーベルの教材を楽しんだか、そして、この教材が子どもの数学的、創造的イマジネーションの非常によい訓練になると述べていることを引用している。

いよいよ、著者は、フレーベルの記念の地ブランケンブルグを訪れる。フレーベル博物館で著者は、自らの数学的な目を通して、フレーベルがいかに若い頃、数学に強い興味をもっていたことをかを発見する。(フレーベルの自伝)「教育の弁明」・岡元藤則訳、玉川大学出版部によれば、彼は若い頃から幾何学、測量、鉱物学のみならず非常に幅広い学問を修得し、様々な形で実践を行っている。筆者記)

著者は、フレーベルの数学の本をみて、ベスタロッチの数学の教師であった、ジョセフ・シュミットに影響されているという。

シュミットという人は、子どもというのは、幾何学やいろいろな形に生まれつき興味をもっているものだといいことを、強調していた近代的な教師であった。

一八一一年、八月に、フレイベルが書いた未発表の日記の中で、彼は自分の子どもの頃を回想して、幼くして母を亡くしたので、自然を観ることが多く、それによって自らを慰めていたと書いているという。

著者は、フレイベルは、こういう経験をすることによって、後にシンメトリー(対称)というような近代的な概念の研究のための基礎を発見していたのであるという。

「フレイベルの幼児期の記憶から……ことばではいい表わせない程、驚きをもってチューリップを観察した……その規則性に心から喜んだ。六つの花卉、種の入ったカプセルは三つに分かれている。幾何学的な形や立体を発見した時のうれしさなど……」

フレイベルは、学校でも算数を得意とし、森林官になった時も、幾何学的な風景の測量に特に魅せられたという。その後、ベルリン大学では鉱物の研究をし、自然界における結晶の根源的な姿をみつけたり、彼のこの方面への興味は決して留まることがなかった。

フレイベルが、幼稚園をはじめまゝの一四年間、カイルハウ(Kellian)で教えた学校でも彼はこの幾何学のプログラムをとり入れた。

著者は数学者として、フレイベルの幼稚園での数学的プログラムは、単に静的な形とかフォームについてはかりでなく、それらがいかに動きの中で行動するかに関係しているといっている。さらに、幾何学的アイデアに関し、フレイベルはユークリッドを越しているともいう。なぜなら、「シンメトリーは、しばしば子どもの芸術的創作と関連して、非常に重要な課題となった」

まとめとして、フレイベルは、子どもにとつても、おとなにとつても非常に近代的な数学教師であったことを述べ、後に、恩物と作業が教室では、厳格でよくない学習となったのは、教師がフレイベル程、十分に数学と遊ぶ背景を持たなかったからだだと結んでいる。

他の分野の専門家が新しい目でフレイベルをみつめ直してみたところに、この小論の興味深さがあり、フレイベルへの我々のより深い理解を求められているような気がします。

(十文字学園女子短期大学 江波淳子)